

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：52501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520641

研究課題名(和文) 高専生の特徴を生かした効果的な英語語彙学習のための調査研究

研究課題名(英文) A study of Effective English Vocabulary Learning: Making Use of a Characteristic of the Technical College Students

研究代表者

瀬川 直美 (SEGAWA, NAOMI)

木更津工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：00280321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語学習の基本となる語彙学習に焦点をあて、より効果的な語彙獲得のための学習方法や指導方法を実証することを目的として、調査研究を主として行った。語彙学習は、普通の授業では、指導する時間がなかなかとれず、小テストを実施することで、各学習者の自学習として取り扱う形になってしまう。本研究では、語彙学習の時間を授業に組み入れ、「書く」「読む」指導を中心に実施した結果、特に低学年には語彙習得とその後の学習に効果があることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to demonstrate an effective learning method and teaching method to learn English vocabularies. Learning vocabularies is the foundations of learning English. In a usual lesson, teaching vocabularies cannot be taken easily. Instead, a teacher only carries out a vocabulary quiz to his/her students in the lesson. In this study, a teacher gives his/her students a vocabulary teaching in the lesson. As a result of teaching vocabularies focusing on writing and reading in the lesson, especially students in the lower grades have an effect on vocabulary acquisition.

研究分野：06

科研費の分科・細目：3005

キーワード：語彙習得 語彙学習 COCET2600 理工系学生の英語学習 英語学習の動機づけ WEB学習 自学習 学習環境

1. 研究開始当初の背景

本研究は、科研費補助金を受けた共同研究のプロジェクトメンバーとして携わってきた、平成 13 年度、平成 15～17 年度、そして平成 19 年度（本研究を開始した時もまだ継続中）の研究が基盤となっており、平成 18～20 年度に受けた科研費補助金で行った個人研究をさらに発展させるものであった。

開始した当初は、上記でも記述した、本研究の基盤となっている、平成 19 年度からの共同研究も継続して行っていたため、プロジェクトメンバーの打ち合わせなどで集まる機会も多く、その際には、本研究における調査の協力や研究過程における相談なども行いやすい状況で進めることができた。

また、開始直後に始める調査には、前述した共同研究の成果として、平成 17 年度に出版された語彙集、「理工系学生のための必修英単語 3300 (通称 COCET3300)」とこの語彙集をベースに作られたオンライン語彙学習サイトに関わるものであったが、個人研究で実施した中・高等学校の英語の先生たちのアンケート調査や COCET3300 に対する意見などをまとめてあったため、その調査を参考にしながら、対象者を広げるところから着手した。

研究計画書では、研究開始当初に、授業実験として、「COCT3300 を用いた学生によるオリジナル語彙集・短文集の作成」を行う予定であった。しかし、この調査研究に関しては、研究対象となる高学年や専攻科の学生の授業を担当しなかったため、実施することができなかった。

2. 研究の目的

本研究は、平成 17 年度に出版された語彙集、「理工系学生のための必修英単語 3300」(COCET3300)とこの語彙集をベースに作られたオンライン語彙学習サイトを基盤にして行った。

この 2 つの語彙学習教材は、これまでも授業などで積極的に活用してきていたが、語彙集という性質上、学習者の自主学習に任せた使い方になりがちであった。結果、自主学習の教材として積極的に使う学生と、必要に迫った時（単語の小テストや課題などの出題範囲として提示された場合など）にしか使用しない学生との学習差が顕著になっていた。そこで、本研究では、「語彙学習は、英語を習得するため基盤となる重要な学習である」ということを再認識し、日常行われる授業において、この語彙学習教材をより有効的に活用し、学習者の語彙力を伸ばしていくことが可能となるような学習方法や指導方法を提案することを最終目的として行った。

また、本研究では、今後取り組む新しい調査研究も企画した。この調査の目的は、高専

の地域差（学習環境）が高専生の英語を学習する動機や意欲、さらには英語能力に対して何らかの影響を与えることを明らかにすることであった。この調査研究の着想に至った経緯は、これまで、異なる高専に勤務した経験より、その土地の地域性と学習環境には、何らかの因果関係があり、英語を指導している中で、英語学習に対しても関わりがあるのではないかと考えるようになったからであった。日本国内のほぼ各県に存在する高専は、その地域の影響を受けやすいのではないかと、という単なる漠然とした考えだけではなく、きちんとしたデータを取って実証するために、本研究においてこの調査を企画した。先に述べた、プロジェクト研究でつながりをもつようになった他の高専の先生方との関わりを生かした調査研究として、本研究に取り入れ、高専の学生の特徴をより明確にし、高専生にあった英語学習（特に今回の研究では語彙学習）を提案することを目的として実施した。

3. 研究の方法

研究初年度は、「異なる語彙学習方法による学習意欲や語彙力の相違点を明らかにする」という調査を行うために、次のような方法で研究準備に取りかかった。

調査の対象者を決め、協力してもらう学校を選定した後、調査の依頼をする。

調査対象となる学校のコンピュータ環境の設定。

事前調査：

それぞれの学習者が、これまでどのような目的で語彙学習をおこない、どのような教材や方法で語彙学習を進めてきたかという調査を行う。

異なる語彙学習方法のグループ分け：

調査対象の学習者を「コンピュータ学習群」と「非コンピュータ学習群」に分ける。

テスト問題の作成：

学習成果を測定するためのプリテスト、ポストテスト、フォローアップテストを作成する。

事後調査としてアンケートを作成する。

上記の研究準備が整った後は、まず研究対象者に対し、プリテストをはじめに行い、語彙力を測定した。その後、コンピュータを使用する語彙学習とコンピュータを用いずに学習する方法で、一定期間、語彙指導と学習を実施した。学習直後に、ポストテスト、それから少し時間をおいた後でフォローアップテストを行い、それらの結果を分析してから、データ化し、研究結果としてまとめた。

また、本研究で新しく企画した調査研究、「高専の地域差と英語学習の因果関係を明らかにする」は、実際に現地の高専を訪れ、

その高専に所属する英語の先生方や学生にインタビューをしたり、アンケートを取ったり、授業観察などをすることができなかった。そのため、現地調査に変わる手段として、本研究においては、学生に対しては、紙媒体のアンケートを主に実施し、英語科の先生方に対しては、紙媒体のアンケートの他、電子メール、また直接、電話で話を聞くなどの方法で、調査を実施した。

4. 研究成果

本研究における、「異なる語彙学習方法による学習意欲や語彙力の相違点を明らかにする」という点で明らかになったことは、語彙学習を行う上で、その学習方法の違いによって、語彙力そのものには大きく影響することはないということが明らかになった。特に本研究における調査の対象者が、主に高専の学生である場合、理系科目を得意とする一方で、文系科目（特に英語）に対して、苦手意識を持っている学生が多いという特徴があげられる。しかし、彼らは、コンピュータを扱うことを得意とするので、語彙学習においても、コンピュータを使用することで、語彙学習に興味をもった。その結果、語彙学習への動機づけや学習意欲といったものに対しては、コンピュータを用いた学習方法が効果的であると言える。このことは、学生に実施したアンケート調査やインタビュー調査などでも明らかになった。一方で、語彙力そのものについては、コンピュータを使った学習は、単調になりがちで、継続して続けることが難しい上、定着した語彙力につながらない結果となった。

本研究における研究成果として、特に主張したい点は、語彙学習を授業の中に積極的に取り入れることで、語彙力の伸びにつながるということが実証できたということである。このことは、特に低学年の学生に顕著に表れた。一般的に、語彙学習は、英語学習の基本的な学習であると認識されているわりに、実際には、授業の中で語彙指導を取り入れることは時間的にも難しいというのが現状である。語彙学習は、授業の中では指導せず、学習者が自分で行う自主学習などとして取り扱われていることが多い。例えば、小テストを実施することで、学習者個人がそのための勉強をするという方法である。本研究においては、語彙学習のための時間を7、8分程度、授業の中に取り入れ、指導者が「書く」練習を促したり、声に出して「読む」ことで、発音練習を行った。また、それに加え、小テストを定期的実施し、その範囲のワークシートを配布し、提出を義務づけるなど、指導者が積極的に学習者の語彙学習に関わるようにした。その結果、前述したように、特に低学年の学生には、語彙力の伸びが認められた。そればかりでなく、より多くの学生が、語彙学習の

意義を実感し、その後の語彙学習の動機づけにもつながる結果となった。

今後は、限られた授業時間の中に、どのような語彙指導や語彙学習を効率よく取り入れることができるかという点を中心にして、さらなる研究を続けていく。また、学習者自身の自律的な学習へとつなげるところまで、本研究を発展させていくつもりである。

本研究では、全国の高専を訪問し、各高専の地域性が与える学習環境と学生の英語学習や英語能力との関連性を明らかにするという調査研究も行った。この調査研究は、この科研費補助金の支援を受けて、はじめて取り組む新しい企画であった。その背景には、本研究者が、これまで、人事交流なども含め、複数の高専で勤務した経験や、共同研究で、全国の高専の英語の先生方との交流が深まったことが関係する。各高専には、それぞれ独自の教育方法があることをはじめ、その地域に密着した、特色ある学生が入学してくることを知り、そのような各高専の独自性が、英語学習にも何らかの影響を与えるのではないかと考えるようになったからである。特に、都市部と地方の学生では、卒業後の進路なども違ってくるので、そのような差が、在学中の英語を学習する動機や、学習意欲に関わってくるのではないかという点を調査する予定であった。この調査研究に関しては、本研究の最終年度から着手することになったことに加え、現地調査をする時間が不足したことなどもあり、まだ満足のいく結果が出ておらず、その成果を今回の研究成果として報告することができない。継続研究として取り組んでいくつもりである。

また、本研究で行う予定であった、授業実験に関しては、授業担当の関係もあり、専攻科の学生や4、5年生などの高学年を対象とした、COCET2600を使用した調査研究も実施することができなかった。この研究に関しても、今後の研究として継続して行い、研究成果として、所属する学会の研究会などで報告するつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

瀬川直美 (2014) 「英語学習における自律的な学習を促すための学習活動」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第33号、pp. 96-103.

〔学会発表〕(計1件)

瀬川直美、 「英語学習における自律的な学

習を促すための学習活動」全国高等専門学校
英語教育学会 第 37 回研究大会、京都府中小
企業会館、2013 年 9 月 20 日 - 9 月 22 日.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 ()

研究者番号：

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：